



Title	イギリス19世紀後半の美術陶器運動：ミントン社の美術陶器製造を通して
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリス19世紀後半の美術陶器運動 — ミントン社の美術陶器製造を通して —

吉 村 典 子

京都市立芸術大学

キーワード

イギリス陶磁史, 美術陶器, ミントン美術陶器工房, 1870年代～1890年代
British Ceramic History, Art Pottery, Minton's Art Pottery Studio, 1870s-1890s

はじめに

1. 美術陶器運動とミントン社
 2. ミントン美術陶器工房の設立経緯とその特徴
 3. スタッフにみる工房組織の内容
 4. 製品デザインにみる美術陶器の特性
 - 4-1 製品の種類
 - 4-2 製品の文様とその表現
 - 4-3 ロンドン時代とストック時代のデザインの比較
- おわりに

はじめに

19世紀イギリスには、デザインの諸問題に対する思想的、組織的、実践的な取り組みにおいて、先進的活動をみることができる。とりわけ、19世紀後半は、日常の製品のデザイン面で様々な展開がみられた時期である。1870年代に現れ出した美術陶器運動（Art Pottery Movement）は、陶磁器製造におけるその一側面を示すものである。美術陶器とは、一般に1870年代から1930年代にかけて、アーツ・アンド・クラフツ運動の精神を基に、あるいは、製品に「美術」性を求めた唯美主義的気運に応じて作られた陶磁器のことを指し、主にその装飾性に重きを置いた手づくりの製品、または、工場生産の一部で比較的手間をかけて製造された製品がこれに当たる¹⁾。製造組織には第1章に分類するように様々なタイプのものが存在していたが、本稿では、後者の中で、「美術陶器」と銘打って、それをつくる工房として開設したミントン社の美術陶器工房（Minton Art Pottery Studio）を中心とする製造活動を一事例として、美術陶器運動の様相を考察することにしたい。これまで、産業における唯美主義的側面を明らかにするために、当時のいくつかの代表的製陶会社（Mintons, Maw & Co., Craven, Dunihill & Co. 等）を対象に、美術陶器製品の特性を考察したことがある²⁾。今回は、そうした大手製造業者の全般的動向をふまえた上で、美術陶器デザインの現存する全データを集めることができたミントン社に対象を絞り、組織内容をより具体的に明示し、収集した

デザイン原画等の全データをデザインの側面から分析を行うことにする。また、対象とするミントン社は、大手製陶業者の中では、1871年という最も早い時期に美術陶器製作専門の工房を開設している。従って、この工房を検討することによって、美術陶器運動の成立期の状況を見ることができる。以上のような点からミントン社を対象に、その美術陶器製造の特性を明らかにし、美術陶器運動の一状況とその意義を検討する。

1. 美術陶器運動とミントン社

美術陶器運動は、共通の主義・主張のもとに展開したものではなく、製陶に関わる様々な組織が、前述のような製品特性のある陶磁器を作り出していった19世紀後半から20世紀初頭にかけての一現象と言える。この時期は、陶磁器のみならず、日常の物品に対して強い美的関心を示し、それに「美術」性を求める傾向があった。その根幹には、生活の中の美を唱えたウィリアム・モリスと彼の思想を継承したアーツ・アンド・クラフツ運動、産業製品と美術の融合を検討した行政からのデザイン改革運動⁹⁾、そして、従来からの様式尊重主義ではなく、自由な表現によって美的効果を重視しようとする唯美主義的思想をもったデザイナーたちの活動等があり⁹⁾、また一方で、当時の中心的消費者層である中産階級の「美術」的物品を欲する強い願望があった。こうした状況は、美的価値を求めるという意味で広く唯美主義の現象と捉えることができる。当時、このような美的関心からものの製作に携わった組織には様々なタイプのものが存在していた。製陶組織を例に、その製作内容から検討すると、次の3つのタイプにそれらを分類することができる。1つは、アーツ・アンド・クラフツ運動の精神に則り、素材と装飾との関わりや製造工程を重視した小規模な制作工房、2つめは大手製陶会社から素焼きの本体のみを購入し、注文に応じて、あるいは、その組織独自のデザインでそれに装飾を施す装飾工房、そして、3つめが大手製陶会社が新部門として開設した美術陶器工房である。第1の例としては、マーティン・ブラザーズ (Martin Brothers) があげられ、活動内容においてはアーツ・アンド・クラフツ運動の精神に近い⁹⁾。彼らは、1873年頃工房を設立し、一品生産を中心とする炆器を制作していた。第2の例としては、シンプソン商会 (W. B. Simpson & Sons) がある。これは、1833年に室内装飾業者としてロンドンに発足した会社であったが、1873年までには、'Art Tile Painters,' 'Art Glass Painers' という看板を掲げて、モー社 (Maw & Co.) 等の大手製陶会社から素焼きの本体を購入し、シンプソン商会のデザインで装飾、あるいは、著名デザイナーに装飾を依頼するという、装飾だけを専門とする組織となった。第3の例には、本稿で対象とするミントン社の美術陶器製造の組織をあげることができる。製造システムは、工場生産の本体に、美術家が直接、あるいは、彼らの監督のもと絵付け師たちが表面の装飾を施すものである。美術陶器製造には、以上のような大きくは3つの種類の組

織が携わっていた。では、このうち第3のタイプにあたるミントン社の美術陶器製造部門は、どのような経緯で設立されたのであろうか。

2. ミントン美術陶器工房の設立経緯とその特徴

ミントン社は、世界的にもその名が知られるイギリスの陶磁器製造会社である（1793年創立）⁹⁾。本拠地は、イギリス中西部のストーク・オン・トレント（Stoke-on-Trent）にある。ミントン社の美術陶器工房は、その本社のあるストーク・オン・トレントではなく、ロンドンのサウス・ケンジントンに建設が進められ、1871年に完成した。1875年の火災で工房が閉鎖するまで、この地での製造が続けられた。近隣にはサウス・ケンジントン・ミュージアム（現V&A）や国立美術訓練学校（National Art Training School: 現RCA）があった。国立美術訓練学校は、1830年代から活発になった政府によるデザイン改革運動グループが、デザイン教育と産業の結びつきや、イギリスの文化におけるデザインの役割の重要性を説き、初期の職人訓練的施設から、進展する産業に対するデザイナー養成を目的とした教育機関へと発展させたものである。1837年にその前身である官立デザイン学校（Normal School of Design）が設立された後、同種のものは、イギリスの主要産業都市に設立されていった。また、サウス・ケンジントン・ミュージアムも、同じく政府の改革運動の一環として、デザインの水準の向上と国民の趣味を養い育てる目的で設立されたものである。これらの教育・文化機関が建ち並ぶサウス・ケンジントンという地区は、1851年のロンドン万国博覧会が開催されたハイド・パークと隣接し、政府の改革運動のメンバーでもある博覧会コミッショナーが、博覧会終了後は学術・文化の場に発展させていくことを意図した所である。ミントン社の美術陶器工房は、同じく博覧会のコミッショナーが、製造業者の中でも主導的位置にあり、博覧会でも多くの賞を獲得した同社に対し、デザイン学校の学生を雇用する工房をサウス・ケンジントンに開設することを求め、設立に至ったものである。従って、政府の改革運動は、単に学術的能力を育成する場の形成ばかりでなく、それを実践する場の形成も構想していたわけである。しかし、それは単に政府からの一方的な構想にあるのではなく、それに至らしめるミントン社の下地的な活動が、工房設立以前に形成されていたことを強調しておかなければならない。それは1865年に開始されたサウス・ケンジントン・ミュージアムの増築工事にみることができる。この増築においてミュージアムには、軽食堂ができ、その一部であるグリル・ルームは、画家でデザイン学校の校長も勤めたエドワード・ポインター（Edward Poynter）によってデザインされ、壁面のタイルは、ミントン社の素焼き本体にデザイン学校的女子学生が絵付けをして完成したものである。このプロジェクトが高く評価され、そうした製造活動の継続が要請されることとなった。従って、ミントン社の美術陶器工房は、その下地となる実際の製造活動が認められ、

また、それが政府の構想と相まって具体的な工房設立へと至ったのである。

工房では、本拠地ストックから送られた素焼き本体に、美術家やデザイナーによって制作された図案を基に、彼らが直接、あるいは、その図案に従って、デザイン学校の学生や卒業生が装飾を施すという方式がとられていた。従って、グリル・ルームのプロジェクトのような製作方式がこの工房の原型になっていると言える。通常、美術陶器運動は、アーツ・アンド・クラフツ運動や唯美主義運動の延長として捉えられ、特に、先に分類したミントン社を含む第3のタイプの製造業者の活動は、時代の動向を商業ベースにのせるような形で「美術」製品を普及させたものとして取り上げられている⁷⁾。しかし、ミントン社の美術工房の設立経緯を検討すると、そうした後発的なものではなく、グリル・ルームの例にみられるような実作業の中で培われた方式を発展させたものであり、政府のデザイン改革運動を後ろ盾に、工房組織が完成されたものである。そして、そこでは他の美術陶器製造組織とは異なった、工業製品に美術家の図案を応用するという方式で「美術陶器」という商品を打ち出しているのである。

3. スタッフにみる工房組織の内容

ミントン美術陶器工房に関わったスタッフとして、78名の氏名が記録されている⁸⁾。本稿では、それらを手がかりにそのスタッフの主な経歴や活動内容を考察する。それにより、工房の組織的特性を読みとることができると考えられるからである。

まず、製作主任 (Art Director) には、画家・イラストレーターとしても活躍していたウィリアム S. コールマン (William Stephen Coleman) が工房開設と同時に就任し、彼が退任する1873年から火災で工房が閉鎖する1875年まで、マッシュウ・エルデン (Matthew Elden) が担当している。制作主任に関しては、第4章3節で後述するように、後の時代までコールマンの影響が強かったことから、彼を中心に取り上げることにする。コールマンは、博物学者でもあり、博物学に関する本も出版し、そこに自作のイラストを掲載している⁹⁾。前章で言及したように、工房の設立経緯は政府のデザイン改革の発想に即したものであったが、そうした特色はこのコールマンの経歴にもみることができる。デザイン改革運動の一環として設立されたデザイン学校は、その教育の一指針としてデザインの源泉を自然に求め、そこには植物学的アプローチが進められていた。つまり、自然の原理を探求し、それを装飾デザインに応用していくというものである。それにおいて、博物学の専門家たちが講師として招かれていた。コールマンによる指導は、その典型例である。従って、コールマンの指揮下で運営されたミントン社の美術陶器工房は、極めて政府の教育機関的色彩の強い組織構造であったと言える。

他の製作スタッフには、クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser) らのような著名デザイナーが自由契約で仕事をしており、多くのデザインを提供していた。それ以外に

は明らかなだけでも70名以上の専属スタッフが存在しており、それらの職種を調べてみると、殆どが絵付け師 (painter) であることから、この工房が手描き絵付けを専門とする装飾工房であることが確認できる。また、この工房は前述のようにその原型が美術家とデザイン学校的女子学生の共同作業にあったように、女性の採用には積極的な姿勢がみられる。スタッフの性別を調べてみると、性別のわかる57名中24名が女性であり、当時の製造業の女子雇用率に比べて高い¹⁰⁾。工房の建物は、2階建てで、空調や衛生面でも優れた環境にあり、上階の最も広い部屋が女性のスタッフ専用用意されていた。これは、ミントン社が、早くから女性の雇用のみならず、その労働条件や地位の向上に関心をもっていたことにもよるが¹¹⁾、当時の社会的認識における装飾デザインと女性の関わりの反映でもあると考えられる。当時、陶磁器製造工程において、成形は男性担当、装飾は女性担当という認識があった。実際、当時の様々な製陶工場の記録写真をみると、装飾部門で作業しているのは殆どが女性である。それは、成形は重労働であるから男性の仕事、装飾は軽作業であるから女性の仕事という性差による体力的観点から形成された考えでもあるが、装飾という作業に対する女性の能力への関心が当時高まっていたのも事実である。1872年『アート・ジャーナル』誌には次のような記述がある。「陶磁器の絵付けほど、女性的で理想的な芸術的作業はないであろう。花や鳥、美しい風景、そして、子供を描く作業は、男性より女性の方が適していると言ってもよい¹²⁾。」一方、デザイン学校においても、比較的裕福な中産階級の子女の入学希望者は多く、社会的にも、女性が自活できる収入を獲得できる技能を身につけていくべきであるという認識も高まっていた。そして、彼女らの親たちは、女子を通わせる学校の地所や環境に対して、世間体から品格のある場を求めている¹³⁾。そうした女子の受け皿として、ミントン社の工房は、製造業と言えども、工場地帯とは遠く離れた文化的地域であるサウス・ケンジントンに位置していたし、工房自体も前述のように衛生環境において考慮されたものであったことから、好ましい環境であったと考えられる。『アート・ジャーナル』誌にもミントン社の美術陶器工房について、具体的に次のように記述されている。「20人から25人の、教育を受けた良家の女性たちが、品位をそこねることのない、有益で整った環境に雇い入れられている。」¹⁴⁾

美術陶器工房は、デザイン学校との結びつきが強く、そこでの教育成果を実践していくという意味で、政府のデザイン運動を具現化するものであった。また、美術陶器は、その需要層として、当時「美術」に関心を寄せていた中産階級層をねらったものとされているが、その製作を担った階層も、女子の雇用状況に見られるように中産階級の組織であったのである。

4. 製品デザインにみる美術陶器の特性

ミントン社の美術陶器に関する当時の資料がミントン・ミュージアム・アーカイヴに保管さ

れている。そのデザイン内容を考察するため、アーカイヴ保管の図案等の視覚資料を中心に分析を進める。現存する資料は、次の①②③の3つのタイプに分けることができる。

- ①デザイン原画：909点の原寸大デザイン原画¹⁵⁾
- ②デザイン画帳：ロンドン工房でのデザインを縮小して描き留めた画帳¹⁶⁾
- ③写真帳：タイルを中心とした製品の写真やデザイン原画が貼られているファイル¹⁷⁾

資料③には、その最初の頁に、ロンドンの工房の閉鎖後は、美術陶器は本拠地ストックで製造され、写真帳にはロンドンの美術陶器の続きとして、ストックで作成した「アート・タイル」のデザインをファイルするという旨の文章が記されている。従って、ミントン社の美術陶器製造は、製作された場所の地名をとって、ロンドン時代とストック時代に分けることができる。両時代の年代については、前者は1871年から火災で工房が閉鎖する1875年までと確定することができるが、後者に関してはいつまで美術陶器としての製造が続けられていたかは定かではない。これまで19世紀後半を中心としたタイル・デザインを分析し、その文様表現から時代区分を試みたことがある¹⁸⁾。それによれば、アート・タイルとされるデザインがみられるのは1870・80年代が中心で、次の時代の表現特徴であるアール・ヌーヴォー様式のデザインが出てくるのが1890年代中葉であった。資料③が「アート・タイル」としてファイルされていることと、そのファイルにはアール・ヌーヴォー様式のデザインがみられないことから、少なくとも1890年代中葉以前のものと言うことができ、ストック時代は初めは1875年、その終わりはおよそ1880年代末から1890年代初頭までと設定することができる。以下、これらの資料を基に分析を進めるが、ロンドン時代の資料に関しては、作品番号、品目、装飾の内容記述という形で、既にミントン・ミュージアムがデータ化している¹⁹⁾。本論ではそのデータに加え、未整理状態にあったストック時代の資料を、ロンドン時代のデータと同じ形式でデータ化し、さらに、装飾の様式、主なモチーフ、技法を両者のデータ項目に加えて分析する。

4-1 製品の種類

製品の種類に関しては、
③の資料はタイルを中心に
ファイルされているので、
①②の資料をもとに
分析をする。その図案点
数は589点あった。その品
目を分類し、それぞれの

順位	品 目	数	順位	品 目	数
1	陶板 (plaque)	192	7	ボトル (bottle)	16
2	タイル (tile)	144	8	鉢 (seau)	13
3	扁壺 (flask)	82	9	植木鉢 (jardinière)	11
4	水差し (jar)	49	10	ボウル (bowl)	5
5	パネル (panel)	30	11	皿 (plate)	1
6	花瓶 (vase)	30	12	その他	16

表1 品目とそのデザイン数

図案数を示したものが表1である。各品目の図案点数を見てみると、陶板とタイルが抜き出て多い。それらの作例やデザイン例は〈図①〉〈図②〉に示した。こうした陶による板状の装飾

材は、その量産が可能になった1840年代から急速に需要・供給とも伸びをみせた製品である²⁰⁾。ヴィクトリア時代の中でもこの頃のイギリスは、産業・経済全体をみても豊かな時代を迎え、繁栄とともに台頭してきたロンドン、グラスゴーといった都市では、建物の建設が進み、その被覆・装飾材として、陶板やタイルが様々なスタイルで導入されている²¹⁾。そして、住宅建設も進展し、唯美主義的嗜好をもつ中産階級の家には、その室内装飾の典型として陶板やタイルが使用されたのである。表1の数値はそれを反映するものと言える。

陶板やタイルに次いで多数をしめているのが、扁壺（pilgrim-flask）である〈図③〉。扁平化させた壺で、この形態は一般に古代ローマや中国にその起源があると言われている。文様表現においては、次の節で分析するが、このタイプの壺には、日本や中国の装飾スタイルを取り入れた東洋趣味を反映した文様を描いたものが中心となっている。

このように表1の図案点数の上位にみられる内容は、当時のファッションの反映とみることもできるが、純粹に形態的側面からそれらを検討すると、装飾面が平面であるという点で共通している。こうした形態は、装飾を施す上で、平面であることから、比較的自由にモチーフを描くことができる。特に、品目の中でも陶板は〈図①〉にみられるように、それをカンヴァスに見立てた絵画風な描き方がその装飾表現の主流となっている。このように、装飾を自由に施すことができる、平面的な形態が、この工房の主な製品の特徴である。

その他の品目には、花瓶や鉢等がある。〈図④〉はそのデザイン内容を示す画帳（資料②）の1頁である。ここにみられるように、これらは容器としての機能はもっているが、当時の室内の暖炉の周辺に飾られている装飾品の類である。表1の品目には、ミントン社が創業以来中心的に製造してきたティー・セットのような実際に使用される食器類は少ないことから、使用という実用性の強い製品より、飾るものとしての装飾陶磁の製作が中心であったと言える。そして、その形態においては、前述のように装飾を自由に表現でき、一つの画面を提示するようなものが多数を占めていたことから、工房での製品はものの機能の中でも装飾性を重視してデザインされていることが、品目とその図案点数から指摘することができる。

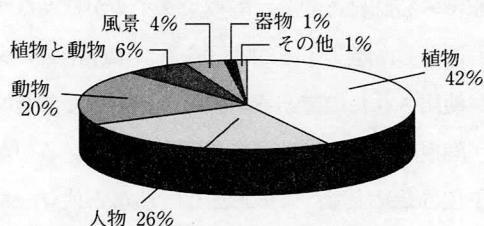
4-2 製品の文様とその表現

美術陶器の文様とその表現を考察するために、タイルを分析対象にする。なぜならば、タイルは表1のデザイン数の上位を占め、かつ、ロンドン時代からストック時代のものまでデザインが通しで揃っており、美術陶器として製造されたミントン社のデザインの全時代の内容を検討できる唯一の資料であるからである。従って、ここでは、本章の最初に示した資料③と、資料①②の中からタイルに関するものを抽出し考察する。

それに関わる資料は全部で930件ある。その中には、サイズのみ、あるいは、デザイン番号のみのものが250件ある。それ以外の680件は、デザイン原画、写真、そして、文様の内容を

記述したメモ等があり、それらからデザインの内容を知ることができる。これらの資料を対象に、主要モチーフやその表現を考察する。

図表1は、文様のモチーフを分類し、その割合を示したものである。植物をモチーフにしたデザインの数が最も多い。植物は、19世紀を通して新しい装飾の源泉として関心が高まり、前述の政府のデザイン改革運動は、デザイン学校での教育を通して、植物から観察できる造形原理を見出し、新しい装飾デザインに結びつけていくことを

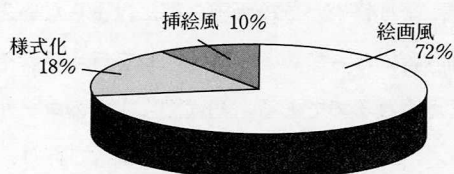


図表1 文様のモチーフ

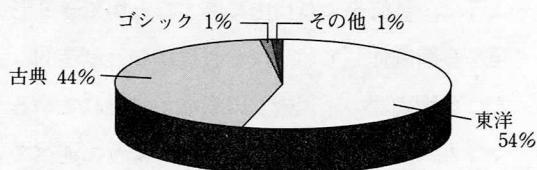
強調していた。一方、ウィリアム・モリスや彼の思想を継承していったアーツ・アンド・クラフツ運動のデザイナーたちは、植物を主なモチーフとして「美や豊かさ」を表現するような装飾制作に取り組んでいた²²⁾。また、植物は、作る側に高い関心があったばかりでなく、当時の消費者においてもそれをモチーフにしたデザインを求める傾向があった。前述のように中産階級の台頭とともに住宅建設が進展していたが、彼らの関心は家をもつことだけではなく、それをいかに自分の趣味をもって装飾するかという点にもあった。そうした状況に応じるようなかたちで、家庭の装飾に関する書物が数多く出版された²³⁾。それらを見ると、とりわけ居間や客間に関しては、繊細で柔らかな雰囲気を求める傾向があり、掲載図版の室内装飾例には、植物をモチーフにした文様が頻繁にみられるのである。

では、図表1で分類したモチーフはどのように表現されているのであろうか。原画や写真、また、文字資料からデザインの内容が分類可能なデータ数は554件である。これら全体を概観すると、その表現内容からそれらを次の3つの装飾表現に分類することが可能である。それは、絵筆の筆触やモチーフの写実的表現を特徴とする自然主義的絵画風装飾〈図⑤〉、奥行きのない平面化されたモチーフの表現を特徴とする様式化装飾〈図⑥〉、そして、輪郭をはっきりもたせ、モチーフの簡略と誇張をともなった表現を特徴とする挿絵風装飾〈図⑦〉、である。それぞれのデザイン数と全体の割合を示したものが図表2である。これにみられるように、絵画風の装飾表現が圧倒的に多く、全体の70%以上を占めていることから、それが美術陶器の主要な表現とすることができる。従って、美術陶器の「美術」という言葉は、絵画風、手描き風という意味が多分に含まれていると考えられる。

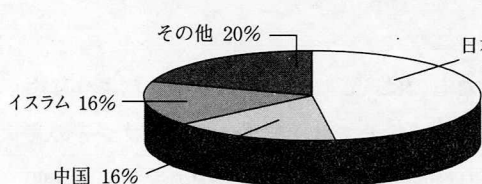
続いて、当時、既に体系化されていた国や時代を起源とする様式で、装飾の内容を分類してみると、東洋、古典、ゴシック様式等が図表3に示した割合で現れている。東洋と古典様式の数が多く、19世紀初頭から中葉にかけて復興運動も高まったゴシックに関わる表現様式は極



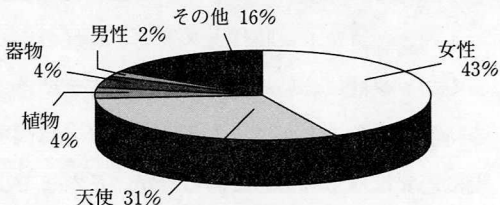
図表2 モチーフの表現



図表3 文様の様式



図表4 東洋の国・文化圏の分類



図表5 古典様式の主なモチーフ

めて少ない。厳格で重厚なものより、軽快で繊細な表現を求め、また、様式的には、ゴシック様式より、東洋や古典様式の装飾が好まれたことは、当時の動向としてこれまでの研究で指摘されている点である²⁴⁾。図表3に示した分析結果からも、それを反映する状況を読みとることができる。本調査では、さらにつきつめて、上位を占めている東洋と古典様式について、前者に関しては具体的な国や文化圏（図表4）、後者についてはそのモチーフを調べることにした（図表5）。東洋の中では、デザイン画に添えられているメモ書きの‘Japanese,’ ‘Chinese,’ ‘Islamic’等の言葉に従って分類すると日本が最も多く、続いて、中国、イスラム文化圏の順である。デザイン例は〈図8〉〈図9〉〈図10〉である。その表現をデザイン原画等で検討してみると、どれも様式化された表現が見られるが、日本のものは、それに加えて絵画風のものがあ、それが日本のモチーフの表現の中心となっている。古典様式に関しては、そのモチーフを調べてみると、女性像が最も多く、次に天使が続く、この二つが圧倒的多数で上位を占めている。古典様式の他の典型でもある男性像や、壺などのモチーフはここではあまり登場しておらず、繊細な衣をまとった女性像や、植物と戯れる天使像が主体である。軽快な表現が好まれる傾向にある中で、東洋や古典様式がよく用いられたという、先達の研究で指摘されている当時の状況は、タイルのデザインを例にすると、頻繁に導入されている日本のモチーフが手描きで繊細に表現されている点と、古典様式ではそのモチーフの中でもより軽やかな天使や女神像を主体に装飾がデザインされているという表現特徴に起因していると言える。

以上のようにミントン社の美術陶器は、その主要要素である装飾において、モチーフ、表現ともに、様々な種類のデザインを有している。そして、その中には、分析結果からも明らかのように、装飾をより自由に施すことができる形態で、より軽やかで絵画風の型にはまらない表現を多数制作している。それにより、創造的な装飾内容になっているという印象を与える。そこに美術陶器の「美術」の意味が含まれていると考えられるのである。初代製作主任のコールマンも、工房の製品について次のように述べている。「これらは、基本的に美術作品であり、水彩画や油絵のように、アーティスト自身が生み出したもののようなオリジナリティーに富んだ製品なのである。」²⁶⁾つまり、軽快で、自由、そして、絵画的な表現は、型にはまらないという意味で、オリジナリティーを強調できる表現なのである。

4-3 ロンドン時代とストーク時代のデザインの比較

ミントン社において美術陶器としてデザインされたものは、これまで指摘してきたような点を特徴とすることができるが、ロンドン時代とストーク時代とでは、装飾のモチーフやその表現に差異はみられるのであろうか。これまで試みた装飾の分析と同様、両時代のデザインに関わる資料が通して揃っているタイル・デザインにおいてそれを検討してみると、これまで指摘してきた全体的なデータから得られた内容とほぼ一致しており、様式や表現においても、それぞれの時代に同じような内容を示している。また、ストーク時代のデザインのメモには、「スタジオ・ブルー (Studio Blue)」という言葉が色の指定のところに記されていたり、「コールマンの画題 (Coleman's Subject)」という言葉が、デザインのモチーフ描写の部分に現れている。前者は、ロンドン時代によく使用された藍色のことを意味し、後者は、コールマンが製作主任を担当していた頃に装飾のモチーフとして頻繁に用いた天使や女性像を描いた図案のことを指している。こうした記述から、ロンドン時代の表現が、確立したスタイルとして、ストークに引き継がれていると判断できる。以上のような点から、ロンドン時代とストーク時代は美術陶器の特性としては大きな差異はなく、ストークでは、ロンドンでのスタイルを踏襲するようなかたちで美術陶器の製造が行われていたと考えられる。

おわりに

これまで、本稿で対象としたような大手製造業者の「美術」製品の製造は、唯美主義の高揚に乗じて成長してきた商業主義的なものとして位置づけられる傾向にあった。そうした側面はあるにせよ、今回考察の対象としたミントン社にみる美術陶器製造の初期的状況は、その工房設立においては、産業と美術を融合させようとする政府のデザイン改革思想に極めて近い発想で形成され、また、その製造方式においては、工業製品に美術家の図案を応用するという他の美術陶器製造組織とは異なったやり方で「美術陶器」という製品を提案している。そして、そ

それは単に美術家の図案を応用しているから「美術」としたのではなく、コールマンの言葉から読みとれるように、装飾図案とその表現におけるオリジナリティーを強調することによって、それを「美術」陶器と呼んだのである。ミントン社の美術陶器製造が開始した頃は、装飾における様式尊重主義的な表現が解体されはじめた時期であった。つまり、それまでは、装飾において一つの様式に絶対的な価値を置いたり、また、折衷する場合においても、各文様の出典が明らかにできる手法がとられていたが、唯美主義が高揚する70年代を中心に、過去の様式の折衷であれ、諸外国の造形表現であれ、一つの様式にはこだわらず、複数の様式を自由に組み合わせ、多彩な表現効果を生み出していく傾向にあった。そのような時代にミントン社は、東洋のモチーフを装飾にした軽快で自由な表現や、植物、女性、天使等をモチーフとした柔らかな表現、そして、自然主義的絵画風の手描き絵付けによる繊細な表現を提示している。過去の歴史諸様式の文様や各国の文様が百科事典として編纂され²⁶⁾、多大な装飾のサンプルが流布していた中で、ミントン社は型にはまらない、繊細で自由な表現をとることによってオリジナリティーを強調し、それにより装飾の「美術」性を意味した「美術陶器」を提案したのである。それが独自のスタイルを求める消費者のニーズに答えることになり、美術陶器製造の一現象をもたらしたと言える。

ミントン社のロンドン工房自体は、前述のように火災で崩壊し、経営的問題からも同地での製造は見合わせ、本拠地ストークで美術陶器製造は続けられた。この際、数人のデザイナーが、同じくロンドンに設立されたドルトンの美術陶器工房（Doulton Lambeth Art Pottery Studio）や、前掲のシンプソン商会等の装飾工房へ移籍し、そこでの活動を活性化させている²⁷⁾。こうした他の製造業者との関係においても、ミントン社の美術陶器製造は、イギリスを席巻した美術陶器運動を成立される中心的な活動の一つであったと位置づけることができる。

註

- 1) イギリス陶磁器史に関しては近年の出版物の中から下記のことを参考にした。
Garth Clark, *The Potter's Art*, London, 1995.
Deborah S. Skinner & Jenine Evans, *Art Pottery*, Stoke-on-Trent, 1996.
G. Savage & H. Newman, *An Illustrated Dictionary of Ceramics*, London, 1989. 等
- 2) 拙文「1870・80年代イギリスのタイルにみる唯美主義」『美学』187号, 1996年。
- 3) イギリス政府のデザイン改革は、1835年「美術と製造」に関する下院特別委員会が設置された頃から具体的になり、美術と行政の双方に精通したヘンリー・コウルの登場により改革運動が活性化する。
- 4) 例えば、イギリスの伝統的な住宅を基礎にしながらも、その要素を自由に組み合わせてピクチャレスクな効果を生み出そうとした建築家 R. N. ショーや、日本の芸術を主な源泉として、簡潔で合理的な表現を見出した E. W. ゴドウィンらの活動があげられる。
- 5) Robert Wallance, Walter, Edwin, Charles からなる 4 人兄弟が設立した工房。Wallance は形態デザイン, Walter は成形と焼成, Edwin は装飾, そして, Charles は経営管理やショー・ルームの

運営を担当していた。

- 6) ミントン社の活動については下記の文献を参考にした。

D. S. Skinner & Hans van Lemmen ed., *Minton Tiles 1835-1935*, Stoke-on-Trent, 1984.

Joan Jones, *Mintons*, Shrewsbury, 1993.

P. Atterbury & M. Batkin, *Dictionary of Minton*, Woodbridge, 1990.等

- 7) Elizabeth Aslin, *The Aesthetic Movement*, London, 1969.

Robin Spencer, *The Aesthetic Movement and the Cult of Japan*, London, 1972. 等

- 8) 前掲書 Jones, *Mintons* には巻末付録にそのリストが掲載されている。

- 9) 主な出版物に下記のようなものがある。

Natural History Picture Book for Children; Our Garden Friends; British Butterflies 等

- 10) 1860年代で全体の約30%であった。陶磁器産業における女性の活動に関しては, Cheryl Buckley, *Potters & Paintresses* (Aylesbury, 1990) に詳しい。

- 11) 2代目ハーバート・ミントンは, 女性のデザイン校進学への奨学金制度も実施していた。

- 12) 'Art-Work for Women I,' *Art Journal*, Vol. XI, 1872.

- 13) S. マクドナルド (中山修一, 織田芳人訳) 『美術教育の歴史と哲学』1990年, pp. 177-179.

- 14) 'Minton's Art Pottery Studio,' *Art Journal*, Vol. XI, 1872.

- 15) アーカイブ・ファイル・ナンバー: 1854~1861

- 16) *Art Pottery Studio Pattern Book*, c. 1872.

- 17) *Art Tile Original Design & Photos*, c. 1880.

- 18) 前掲拙文「1870・80年代イギリスのタイルにみる唯美主義」

- 19) 前掲書 Jones, *Mintons* の巻末付録に掲載。

- 20) 中世に見られたようなイギリスのタイル芸術復興の動きが1820年代末からみられ, 30年には再現可能になる。そして, 40年の粉末圧縮法という成型法の開発により, 確実な生産と量産が可能になる。

- 21) 拙文「タイルによる通路装飾ワリー・クロースについて」では, グラスゴーを一事例として, 住宅におけるタイルの導入状況を考察した。『デザイン理論』33号, 1994年。

- 22) ウィリアム・モリスは, 装飾デザインについて次のように述べている「表面装飾とは, (中略) 現実再現のためでもなく, 事実を直接伝えるためのものでもない, それは美と豊かさのために存在するものである。」Willam Morris, *Some Hints on Pattern Designing*, London, 1899, p. 1.

- 23) 当時の代表的出版物であり, かつ, 本稿で参考にしたのは下記の文献である。

Charles L. Eastlake, *Hints on Household Taste*, London, 1868.

W. J. Loftie, *A Plea for Art in the House*, London, 1876.

Robert W. Edith, *Decoration & Furniture of Town Houses*, London, 1881.

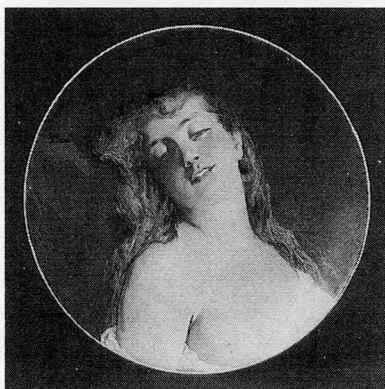
Hugh R. Haweis, *The Art of Decoration*, London, 1889等。

- 24) 例えば, 唯美主義の状況を論じた Mark Girouard, *Sweetness & Light* (Oxford, 1977) では, 「日本, 古典, イタリア・ルネサンス, そして, 18世紀イギリスの様式が流行し (中略) 堅牢そうで, 威厳のあるものより, 繊細で洗練されたものが好まれた。」と指摘している。PP. 4-5.

- 25) 'Minton's Art Pottery Studio,' *Art Journal*, Vol. XI, Jan. 1872.

- 26) Owen Jones, *The Grammar of Ornament*, London, 1856はその代表例である。

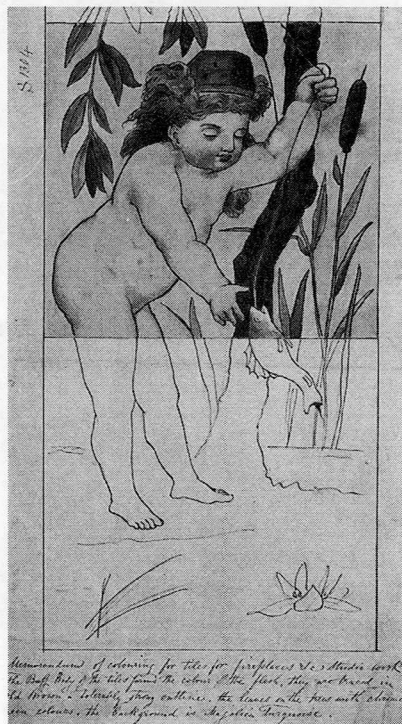
- 27) 例えば, コールマンの後を継いだ製作主任マシュウ・エルデンは前掲のシンプソン商会に移籍し, 女性デザイナーとして活躍した H. バーロウ (Hannah Barlow) はドルトンに移り, 彼女の手掛けた製品はドルトンの美術陶器の代表的製品の一つとなっている。



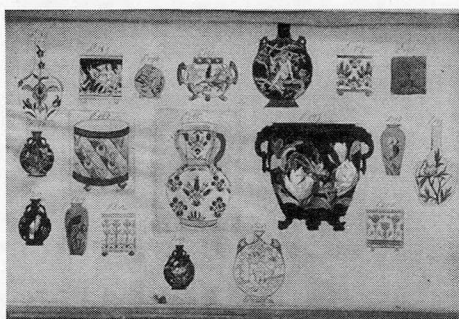
図① 陶板, 1884年



図③ 扁壺, 1873年



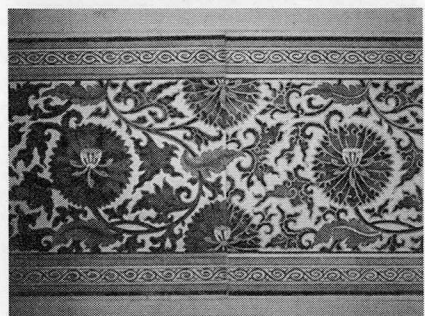
図② タイル・デザイン原画,
1871年頃



図④ 美術工房パターン・ブック, 1872年頃



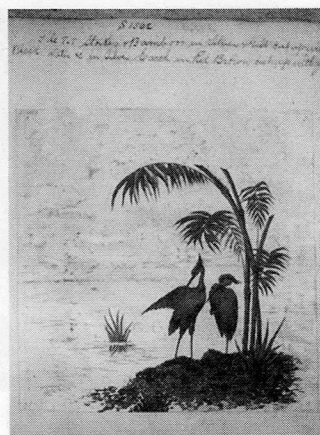
図⑤ アート・タイル・デザイン原画 (絵画風装飾)



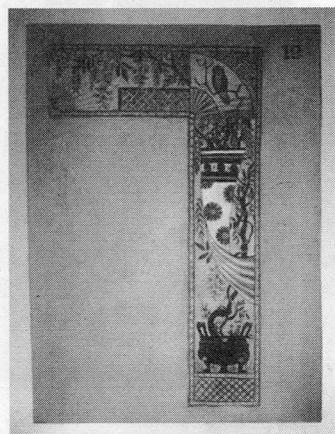
図⑥ アート・タイル・デザイン原画 (様式化装飾)



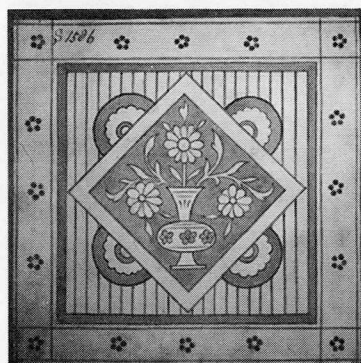
図⑦ アート・タイル・デザイン原画 (挿絵風装飾)



図⑧ アート・タイル・デザイン原画
(日本風)



図⑨ アート・タイル・デザイン原画
(中国風)



図⑩ アート・タイル・デザイン原画
(イスラム風)